

研究ノート

日本に現存する心理学古典的機器を扱った論文の展望

吉村 浩一（法政大学・文学部）

要約：本研究は、日本に現存する心理学古典的実験機器類について書かれた論文のレビューである。1998年から2014年にかけて科学研究費補助金を獲得して行われた7件の共同研究がこの研究を前進させた。第1節と第2節では、東京大学・京都大学・東北大学・関西学院大学・立命館大学・新潟大学・金沢大学の7つの大学に残る機器類に関する文献をレビューする。そのような機器類の中には日本製のものも多く、それらは主に島津製作所・山越工作所・安藤研究所・竹井製作所の4社が製造した。第3節と第4節では、それらの会社が製造した心理学機器を扱った論文とカタログ情報をレビューする。日本の会社が作った心理学機器類では、1920年代に盛んだった適性・性能検査で使う機器類がかなりの比重を占める（第5節）。また、台湾大学には台北帝国大学時代に購入された数十の古典的実験機器が現存している。第6節では、それらの機器類と他の学問領域の現存機器類についてコメントする。第7節では、日本心理学会が発行する会員誌「心理学ワールド」にこれまでに掲載された日本の古典的実験機器に関する20編の記事をリストアップする。

キーワード：日本の心理学史、古典的実験機器、帝国大学、適性検査

はじめに

1888年に東京帝国大学（当時の校名は帝国大学）で元良勇次郎が「精神物理学」の講義を開始したことをもって日本のアカデミック心理学の嚆矢とするのが一般的だが、それから百年以上を経過した20世紀の終わりになると、わが国における心理学の歴史を振り返る研究の必要性が主張されるようになった。そうした研究が科学研究費補助事業として採択されると、多くの研究者が関わる共同研究として発展することになった。平成10年（1998年）から平成24年（2014年）までのあいだに7件が科学研究費の補助を受けて実施され、日本の心理学史に関係する多方面からの研究が進められた。筆者は、一連の共同研究のうち、2007～2008年度と2010～2012年度の基盤研究B（研究代表者はともに当時立教大学の長田佳久教授）に研究分担者として参加し、日本に現存する心理学の古典的実験機器を調査しアーカイブ化する研究に取り組んだ。さらにそのような歴史研究の盛り上がりもあり、日本心理学会の教育研究委員会内に、資料保存小委員会が設置されるに至った。

筆者は、資料保存小委員会（委員長：佐藤達哉立命館大学教授）の一員として、立命館大学の藤健一教授（現名誉教授）とともに日本の大学に残る心理学古典的実験機器の実態調査を行い、その成果に関連する文献を公表してきた。本稿ではそれらを中心に、現存する心理学古典的実験機器に関する論文を

整理・展望することを目的とする。資料保存小委員会が行ってきた現存する機器類の調査・撮影データは、日本心理学会が運営するウェブページ「心理学ミュージアム」に「歴史館」というページを設けてもらい、公開してきた。本稿で取り上げる論文には、筆者とは異なる立場からあるいは筆者の能力の及ばない観点から作成された論文も多い。論文として公表されたものを中心に、日本に残る心理学古典的実験機器とその周辺に関わる文献の総覧を目指したい（科学研究の成果報告書に掲載された文献や学会発表されたものは最小限にとどめた）。

第1節 資料保存小委員会が調査した研究施設

2013年8月の関西学院大学から開始した調査・撮影は、現時点で、2018年8月に行った文教大学まで8校の調査終え、うち7校のデータを、日本心理学会が運営する「心理学ミュージアム」の「歴史館」に登録・公開している。7校のうち3校は旧帝国大学、2校は私立大学、残りの2校は旧制高等学校で現在は大学となっている。登録された機器類は、旧帝国大学と私立大学の5校では、現在に引き継がれているそれぞれの大学の心理学研究室で大切に保管されている。2校の旧制高等学校では、後継の大学の研究室以外に大学内の資料館に移管し、大学全体として保存している機器類もかなりある。それら7大学の「歴史館」掲載事項の概要を、調査を行った

順に説明する。

【関西学院大学文学部総合心理学科】

2013年8月26日から29日まで、関西学院大学の宮田洋名誉教授と中島定彦教授の立ち会いのもと現地調査を行い、41点の機器類を撮影・登録した。この研究室の創設は1923年（大正12年）で、私立大学では珍しく、戦前に外国から実験機器を輸入していた。それらの機器以外に、創設時の教員であった今田恵が参加した1929年ニューヘブンで行われた第9回国際心理学会での集合写真（パブロフ（I. P. Pavlov）が特別講師として講演し写真中央に写っている）を同研究室では大切に保存しており、その写真も「歴史館」に掲載した。そこには、ラシュリー（K. S. Lashley）やソーンダイク（E. L. Thorndike）のほか、今田恵や慶応の横山松三郎など何人かの日本人研究者も写っている。また、研究室創設当初、ドイツ Zimmermann 社から機器類を購入する際、同社から送られてきた送り状兼勘定書も額に入れて大切に保存されているので、「歴史館」に掲載させてもらった。

【立命館大学文学部心理学科】

2014年3月13日から15日まで、立命館大学の藤健一教授とともに現地調査を行い、53点の機器類を撮影・登録した。同心理学教室は第二次世界大戦後に創設されたため、残されている機器類のほとんどは戦後のものだが、同教室創設時の教員であった内藤耕次郎は、戦前に京都大学で学び、そこで使用していた機器類のいくつかを立命館大学に残した。のちに藤健一教授は、京都大学にあったと推察される機器類を京都大学に返納した。その当たりの事情が、藤（2006）に記されている。また、内藤耕次郎は、内藤湖南の子息で、「色聴」という共感覚の持ち主でもあった。内藤耕次郎がケント紙に描き表した大量の「色聴図」が研究室の財産として保存されているので、「歴史館」にも掲載させてもらった。

立命館大学文学部心理学科は、2016年4月から大阪に移り、立命館大学総合心理学部となった。京都の文学部心理学科に収蔵されていた機器類の多くは、現在では総合心理学部の入る校舎に設けられた展示ケースに入れられ、学生たちにも公開されている。

【京都大学大学院文学研究科心理学研究室】

2014年8月27日から29日まで、京都大学の荻阪直行名誉教授立ち会いのもと、現地調査を行い、55点の機器類を撮影・登録した。機器の中には赤いペンキで登録番号が手書きされたもののがかなりあるが、

それは1906年の研究室開設時の初代教授松本亦太郎が持ち込んだ機器類であることの名残である。のちに、明治39年から明治43年までの備品簿の控えが発掘され、その写しが同研究室に残されている。「京都帝国大学文科大学物品監守簿（写）心理学教室之部」である。この貴重な資料も撮影し、「歴史館」に掲載している。

同研究室は、保存している古典的機器類を独自のホームページ「京都大学文学部心理学古典機器博物館」（1999年にウェブ設立, <https://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/museum/Contents.html>）でも公開している。そこには松本亦太郎によりもたらされた機器類のコレクション34点が収蔵されているが、それらは今回の調査で「歴史館」に登録した55点と重複している。

また、同研究室の読書会に古くから伝わる教室の記録帳兼落書き帳である「大福帳」も大切に保管されている。プライベートな内容も多く含まれているため公開はされておらず、その表紙のみの写真を「歴史館」に掲載した。また、戦後復興の一環としてグレアム（C. H. Graham）教授を招聘して1952年8月に行われた「京都実験心理学セミナー」に全国から参加した、当時の若手研究者たちの寄せ書きも大切に保管されている。その寄せ書きも「歴史館」に掲載させてもらった。さらに、研究室に飾られている京都帝国大学創設時（1906年）の初代心理学教授松本亦太郎の半身座像（1928年制作、縦79 cm、横64 cm、油彩）も、「歴史館」への掲載が認められた。作者は長谷川路可で、この絵を描く1年前には、次に記す東京帝国大学における松本亦太郎の立像を描いている。

【東京大学大学院人文社会系研究科心理学研究室】

2014年12月3日、東京大学の新美亮助助教（当時）に立ち会ってもらい横澤一彦教授の協力のもと、現地調査を行い、23点の機器類を登録した。わが国最初の帝国大学として、国内外から最大級規模の機器類を購入したが、関東大震災や第二次世界大戦の戦災の影響もあり、残された機器類は必ずしも多くない。東京帝国大学文科大学心理学教室（1910）が編纂した『実験心理写真帖』や初代教授元良勇次郎時代から使用し続けている備品台帳を通して、購入した機器類の規模の大きさをうかがい知ることができる。備品台帳には什器類を含め、心理学教室が購入した実験機器類が購入価格とともに記載されている。台帳に掲載されている記録のうち、「明治22年

(1889年) 3月22日」(最初のページ) から昭和25年までのページを撮影し「歴史館」に掲載することを認めてもらった。

また、同研究室には戦前の卒業論文が残されており、中にはカイモグラフに記録したデータが資料として添付されたものもある。カイモグラフ記録の実物は貴重なので、撮影した記録紙例を「歴史館」に掲載させてもらった。

京都大学の説明の折にも触れたが、長谷川路可により描かれた、第二代教授松本亦太郎が子どもに対して書記実験を行っている様子の立像が額装され、同心理学教室の事務室に掲げられている。その撮影も許され、「歴史館」に掲載した。

【東北大学大学院文学研究科心理学専攻分野】

2015年3月26日から28日まで、東北大学の行場次朗教授(現名誉教授)と研究室の院生の皆さんに手伝ってもらって現地調査を行い、76点の撮影・登録を行った。その中には、機器類だけでなく、第二代教授大脇義一が開発した3種類の知能検査も含まれている。調査の際、大いに役立ったのは、1991年に見つかった「昭和十年調 器械・器具カード控簿」である。そこからは、現存する76点の機器類のかなりの部分の購入記録が得られ、購入先も示されていた。この貴重な資料のすべてのページを撮影し、「歴史館」に掲載した。

1922年に開設された東北帝国大学心理学研究室初代教授の千葉胤成は、「ヴント文庫」の購入で知られており、論文の抜刷などを含め購入した15000点を越える資料は、現在、東北大学附属図書館に収蔵されている。ヴント文庫を購入する際の経緯を始め、研究室のあれこれを、千葉は出身校である京都帝国大学心理学研究室に倣い「大福帳」に記録することを始めた。今日まで続く大福帳の1冊目の最初のページの撮影を許され、「歴史館」に掲載した。また、千葉の揮毫した「法三章」と呼ばれる額が、研究室に出入りする誰もの目に付くところに掛けられている。「火の用心 我等の研究室 共同研究」と書かれたこの額の写真も、「歴史館」に掲載することができた。

【新潟大学人文学部心理学研究室および旭町学術資料展示館】

2015年10月23日から25日まで、新潟大学人文学部の鈴木光太郎教授(現名誉教授)立ち会いのもと現地調査を行い、78点の機器類を登録した。同研究室は、旧制新潟高等学校時代、黒田亮の赴任により心

理学研究を開始した。78点のうち、登録番号NG00001~NG00012の12点は、同大学の旭町キャンパスにある「旭町学術資料展示館」に収蔵・展示されている。この展示館の入る建物は1929年に建てられたもので、2005年に国の登録文化財に認定された。NG00001~NG00012の画像の一部は、われわれが行った調査ではなく、以前に金沢大学総合メディア基盤センターの高田良宏教授を研究代表者とする科学研究「非文献資料リポジトリによる機関横断的学術資源群形成に関する研究」(課題番号:24300310)において撮影されていた画像を利用させてもらった。NG00013以降の機器類は、新潟大学五十嵐キャンパスにある人文学部棟の廊下を中心に、心理学研究室で管理・展示されている。

同研究室には、機器類以外に、旧制新潟高等学校時代に黒田亮が教育や学会発表時に用いたものと思われる多数の掛図が保存されている。それらもすべて撮影し、「歴史館」に掲載した。

【金沢大学資料館】

金沢大学の心理学研究室で保存してきた古典的機器類は、現在、同大学の資料館に移管し整理番号を付して保存庫に収蔵されている(常設公開はされていない)。2016年9月5日から7日まで同資料館で調査を行い、57点の機器類を撮影・登録した。筆者が金沢大学文学部に在任していた当時(1990年代)、学部事務部の協力を得て、昭和24年から31年までの出納を記録した「金沢大学法文学部備品出納簿Ⅲ学術編」を閲覧することができた。その中に旧制四高から心理学研究室へ移管された物品が掲載されており、それらの写しをとっておいた。それを「歴史館」で公開している。

第2節 各大学に保存されている機器類を扱った文献

7大学に残る古典的機器類のうち、最も多くの研究者により検討されているのは東北大学の機器類である。まず、東北大学に在職していた研究者自身による調査結果が、丸山(1999)により示された。そこには、度重なる震災により保存されている機器類のかなりのものが大きな打撃を受け、廃棄せざるを得なかった事情が説明されている。特に、1978月12日発生の宮城県沖地震では、心理学研究室が9階建ての最上階にあったことが被害を大きくし、ガラス製の部品や精密部品の被害が壊滅的であったことが記されている。また、この論文では、1991年に古い戸棚のひきだしから見つかった「昭和十年調 器

械・器具カード控簿」についても言及されており、この発見により、それまで同研究室では、導入された輸入機器類はヴント文庫に付いてきたものとの言い伝えがあったが、それが誤りであることが判明した。この資料に全機器の購入記録が価格とともに掲載されていたからである。続いて、畑山・牧野(2003)は、科学研究費の補助を得た共同研究の報告書の中で、その時点で東北大学に残っている機器類について、「昭和十年調 器械・器具カード控簿」と丸山欣哉名誉教授から提供された情報とを利用し、残された機器類の同研究室内での通称と正式名称との照合を進めた。さらに、日高・行場(2009)では、東北大学の機器類を京都大学に残る機器類と比較対照する形で、東北大学の機器類の特徴が考察された。2015年の調査後に筆者は、現存する実物確認と内外の製造会社のカタログに掲載されている記述を照合し、それにより得られた新しい知見を吉村(2016a)にまとめた。この論文では、調査により新発見された知見に加え、それまでの見解の誤りをいくつか正すことができた。それでもなお、東北大学の機器類には不明な点が何点か残った。その理由の一端は、震災による欠損品の多さにある。また、Yoshimura and Gyoba(2015)では、この年の調査で明らかになったことを追加して、東北大学に残る機器類の全体像を英文で公表した。

次に、東京大学に残る古典的実験機器については、大山・佐藤(1999)で検討されている。そこでは、残された機器類のほか、備品台帳のデータをもとに、導入備品類の傾向がどのように年代変化していったかが分析された。明治期において同研究室が導入機器をどのように使っていたかを捉えるには、東京帝国大学文科大学心理学教室(編)(1910)の『実験心理写真帖』をはじめ、大槻(1911)などが参考になる。

3番目に、京都大学に残る古典的実験機器については、荻阪良二(1999)と荻阪直行(2000a)が考察・評価している。荻阪良二(1999)は、まず「古典的」と「歴史的」という用語使用の違いに注意を喚起し、その上で京都大学に残る機器類を材料に、それらの機器類の価値を論じている。この論文では、上述した「京都帝国大学文科大学物品監守簿(写)心理学教室之部」の原本に明治39年から昭和23年までの購入備品の記録が残っていると書かれているが、「歴史館」に掲載している資料には明治45年3月26日までの分しか収録されていない。その最後のページに

は、「明治四十五年三月三十一日物品看守者松本亦太郎■変更(以後監守簿別冊)」(■1文字判読できず)とある。しかし、別冊の所在は不明である。荻阪直行(2000a)では、上述したウェブページ「京都大学文学部心理学古典機器博物館」に掲載されている各機器について詳しい解説がなされている。荻阪直行(編著)(2000b)には、荻阪良二(1999)や荻阪直行(2000a)に加えて、上述の丸山(1999)や大山・佐藤(1999)も再録されている。

4番目に、立命館大学に残る実験機器については、同大学の心理学研究室に残る実験機器の保存に努めた藤(2006)が、現存する機器類の整理を行った。彼はまた、古典的機器の動作の不明瞭さを解決するため、機器の復元にも取り組み、藤・吉岡(2013)において、1930年から1960年にスキナーが制作した累積記録器の構造と機能を再現した。

残る3校に関しては、現存する心理学の古典的実験機器を扱った資料は、独立した論文の形では公開されていない。

第3節 輸入機器を模造・改良した日本の4つの会社

日本の大学が帝国大学を中心に実験機器を導入した当初は、ドイツのZimmermann社など、ほとんどが欧米からの輸入品であった。やがて、輸入された機器類を手本に、日本でも模造品が作られるようになり、それらが改良され、さらには独自製品が開発されるようになった。そうした機器の製造を担ったのは、主に次の4社であった。創業年順に、1875(明治8)年に京都で創業した島津製作所、1879(明治12)年に創業した山越工作所、1924(大正13)年に創業した安藤研究所、それに1927(昭和2)年に創業した竹井製作所である。島津製作所を除く3社は、東京での創業であった。

4社のうち、創業当初から心理学実験機器を作っていたのは、安藤研究所と竹井製作所の2社であった。また、4社のうち2社は、途中で社名を変更した。山越工作所は第二次世界大戦中に山越製作所と変更し、竹井製作所は1952年に竹井機器工業株式会社へと変更した。また、4社のうち現存しているのは、島津製作所と竹井機器工業の2社だけである。安藤研究所は、安藤謚次郎(ひつじろう)の個人企業の性格が強く、彼が亡くなった1932(昭和7)年までのわずか8年ほどの短命な会社であった。ただし、現存している安藤研究所製の機器はかなり多く、彼の死後も山越工作所や竹井製作所が販売を引

き継いだ形跡がある（たとえば安藤研究所と竹井製作所の両社のプレートが付いた機器があるなど）。また、山越工作所は山越製作所と社名を変えたあと、二代目社長の山越長七が第二次世界大戦終結と時を同じくして亡くなり、その後、同社は衰退していった。山越製作所としていつまで存続したかについて確かな資料はないが、『帝国銀行会社要録43版』（昭和37年）には社名記載があることから、その頃までは存続したと思われる。これら4社に関しては、筆者が調査を行い、以下の論文で検討した。

島津製作所に関しては、吉村（2016b）において、同社が製造したものに加え、同社により輸入され現存している外国製の機器についても探索を広めて整理した。現在に至る同社の企業活動の歴史をつかむには、創業地の京都にある「島津製作所創業記念資料館」が参考になる。若干ではあるが、同資料館に心理学に関する機器類も展示されている。

山越工作所については、吉村（2014）において、同社の歴史を追いながら、現存する機器類を同社の数種のカatalogと照合しつつ整理した。創業者である山越長七の名を、養子である二代目社長が引き継いだため、「2人の長七」の業績を混同せずに捉える必要があり、上記論文では、2人の業績を一覧表で区別して明確にした。

安藤研究所は、安藤謚次郎が日本海軍に所属していた時期に行っていた職業適性検査の研究を推し進めるため、退役した年に設立した会社である。吉村（2016c）では、海軍時代に彼が適性検査の開発を行うようになった経緯とそこでの業績、そして退役後の安藤研究所時代の活動を調査した上で、現存する安藤研究所製造の機器類をリストアップした。当時、心理学実験に用いられていた機器類を参考に、安藤は適性検査を幅広い面から実施するため、会社を興して機器類の開発を推し進めようとしたが、志半ばに48歳という若さで急逝した。

竹井製作所は、創業当初から心理学実験機器の製造に従事していた。創業者は竹井七郎で、二代目社長および会長を務めた子息の竹井昭雄（てるお）氏に対し、2009年8月31日に竹井機器工業株式会社東京支社の会議室でインタビューを行い、創業当初の様子を聞き取ることができた。昭雄氏の話によると、大正時代の終わりに近づいた頃、福島造り酒屋の長男であった七郎が、両親の反対を押し切って上京し、東京で髪結いと学生相手の下宿屋を営んでいた従姉妹のところに住み込み、明治大学経済学部に通

い始めた。20歳頃のことだったそうである。従姉妹の下宿で同宿していた早稲田大学心理学科の学生と親しくなり、その人たちとのあいだに心理学実験で使う機器の話があがった。ドイツのZimmermannというメーカーが実験に必要な機器を作っているが、日本には心理学実験機器を作る会社がまだないため、自分たちの研究が思うように進まないと言われ、七郎は心理学研究に必要な実験機器の製作会社を作ろうと決心したとのことである。さらに昭雄氏の話によると、当時、安藤研究所があり、その所長はフランスの航空隊でパイロットの適性検査を学んで、研究所を設立していた。七郎はそこで2、3年、みっちり仕込まれたのち、独立して竹井製作所を興したそうである。機器の設計担当者も安藤研究所の所長が世話し、従業員4、5名の小さな町工場を、工場主もろとも雇用して事業を始めたとのことである。しかし、上述の安藤研究所の状況と付き合わせると、安藤謚次郎の急死によって、竹井七郎がその会社を引き継ぎ本格的に心理学関係の機器類を製作することになったと推察できる。そしてそれは、1927（昭和2）年の竹井製作所創業からは少し遅れ、安藤謚次郎がなくなった1932（昭和7）年以降のことと推察できる。竹井製作所時代の製品Catalogは残っていないが、筆者は竹井機器工業となってからの製品の写真記録や1970年代以降のCatalogデータをデータベース化し、吉村（2012）でその内容と意義を考察した。また、Catalog作成以前の写真記録データを利用し、同社の記憶学習実験機器の変遷を追跡した（吉村、2013）。

第4節 日本の4社が作成したCatalog情報

機器類を製造し販売する企業である以上、製品Catalogは充実していると予想されるが、上記4社については、時代の古さもあり必ずしもそうと言えない。戦後（1952年）に、竹井製作所から名前を変えて現在もなお、心理学や体育学を中心とする製品を作り続けている竹井機器工業株式会社でさえ、Catalogが充実したのは1970年代半ば以降であった。同社が研究者から依頼を受け特注品として製作した機器類については、いわゆる一点物の試作品的性質が強く、原則的にCatalog掲載されていない。需要が見込まれ、のちに量産体制に入ったもののみ、Catalog掲載したと思われる。ただし、のちのCatalogには掲載されていないが、かなりの特注品の写真が、納品時に撮影され同社に保存されている。そこ

で筆者は、新潟にある本社に出向き、それらをデジタル化・データベース化してウェブ公開する作業に取り組んだ。データベース化した資料の概要は吉村(2012)で示した。

古い機器は残されていても古いカタログは残りにくく考えていたが、国会図書館の大規模事業として著作権が切れた古い書籍等のデジタル化作業が進められ、心理学古典的実験機器を扱ったカタログもかなり収蔵された。その「国会図書館デジタル化資料」の中に、島津製作所と山越工作所のカタログ数冊が含まれている。

島津製作所が製作した心理学に関係する機器類は、同社の理化学機器カタログ(島津製作所, 1936)の中に「性能検査器械」(これについては次節で詳述する)としてまとめて掲載されている。それらは、島津製作所の自社製品であるが、これとは別に、島津製作所が輸入を請け負った機器類を含め心理学関連機器だけを集めたカタログ(島津製作所, 1926)も存在する。そのカタログの存在は、2013年の関西学院大学での調査で判明した。現物は、現在も関西学院大学に保管されている。このカタログは貴重で、国会図書館デジタル化資料に含まれていないだけでなく、島津製作所創業記念資料館でも所有していない。そのことが判明したので、筆者は同資料館を訪れた際、このカタログのデジタルデータを寄贈した。

4社のうち、戦前の心理学関係の製品カタログがもっとも充実しているのは山越工作所である。中でも、山越工作所(1933)は、海外の機器の模造品、改良品、独自製品を広く収録した120ページに及ぶ大部のカタログで、各機器の用途や使い方についても簡単に説明されている。また、同社は、性能検査機器だけを扱ったカタログ(山越工作所, 1932)も作っていた。これらの山越工作所のカタログは、国会図書館デジタル化資料でしか存在を確認していない。この資料を中心に、吉村(2014)において山越工作所のカタログの意義を検討した。

短命だった安藤研究所に関しては、カタログの存在は確認されていない。しかし、かつて存在していた可能性は高い。安藤研究所から出版された安藤自身の著書『進化と能率』(安藤, 1927)の奥付後の広告ページに、「目録進呈」とあることから、何らかのカタログはあったはずである。安藤謚次郎は、安藤研究所を興す前までは陸軍で適性検査の仕事に従事していた。その当時に作成した適性検査機器は自ら

販売することができなかったため、山越工作所に販売を委託していた。その際、開発した機器類の特許を申請しており、19点分の契約書と認可書が、アジア歴史資料センターのアーカイブ・データ[JACAR: Ref.C08050893700の第2画像から第10画像まで]に保存されている(Ref.番号の頭にCが付くのは防衛省防衛研究所の資料であることを示す)。そこには、特許申請に必要なため、何点かの申請機器の三面図も付されている。これらの事情については、吉村(2016c)で紹介した。

Yoshimura(2016)では、わが国に残る心理学の古典的実験機器の全体像を英文で紹介した。また、第2節で取り上げた各大学に残る機器類を、第3節で扱った日本の4つの製造会社がどのように製造したかも解説した。そこでは、輸入機器(imported apparatuses)とそれらの模造品(replicas)、さらにはそれらの改造品(reformed products)に分け、4社のカタログ情報も加えて解説した。

第5節 特筆すべき適性・性能検査

第二次世界大戦前にわが国で心理学実験機器類を製造していた上記4社のうち、島津製作所は他の3社に比べて大規模な企業であり、心理学関係の機器類を主力製品にしていたわけではなかった。島津製作所が心理学関係の機器を製造するようになったのは、輸入代理店として欧米から心理学実験機器を輸入する業務に携わったことも理由の1つであろうが、大正末期から昭和のはじめにかけてわが国で適性・性能検査が盛んであったことも重要な理由であったと推測できる。当時の適性・性能検査は、大学での心理学研究が関与するだけでなく、小中学校や行政機関などでの職業指導に広く用いられ、それに関連する機器類には広い需要が見込めたはずである。それらの機器を製造・販売することは、大企業にとっても採算のとれる部門だったと思われる。

当時の適性・性能検査の流行は、島津製作所以外に安藤研究所と山越工作所にとっても重要であった。まず、安藤研究所は、まさに適性検査のために作られた会社であった。山越工作所もこの検査のための専用カタログを作り何回も改訂するくらい力を入れた分野であった。竹井製作所は、適性・性能検査の流行よりやや遅れて創業したこともあり、この分野に特に力を入れることはなかった。

ここで、「適性検査」と「性能検査」の違いについて説明しておくべきであろう。ともに適性を査定す

ることを目的にしている点は共通するが、「適性検査」と「性能検査」には、次のような違いがあった。前節までにも記したように、大正時代の後半、安藤謚次郎は陸軍において適性検査の開発に従事し、退役後の1923（大正12）年に、『心理学的適性検査法上・下』（安藤，1923）を著し、自らの適性検査の体系を示した。それよりやや遅れて、東京帝国大学心理学教室で松本亦太郎のもとで学んだ増田幸一は、卒業後、協調会産業能率研究所所員として『適性考查要領』（増田，1925）を著した。2人はともに、「適性」という用語を用いて、職業適性を査定するための検査の開発に努めた。それに対し、昭和のはじめ頃、東京帝国大学心理学教室の助教授で航空研究所所員を兼務していた淡路円治郎は、「適性」ではなく「性能」という言葉を用い、淡路（1927）の中で次のように主張した。「性能研究は職業活動に限定されるものではなく、個性心理学や差異心理学など理論心理学で用いるべき概念」（p.265）である。要するに、職業の適性に限定するのではなく、各人の持っているパーソナリティ特性を「性能」という面から捉えようとしたのである。淡路の影響を受け、島津製作所が製造した一連の適性・性能検査のための機器類は「性能検査」と名付けられた（島津，1936参照）。また、山越工作所の製造品も、当初は「特許心理・生理学的適性検査器械」としていたが、のちのカタログ兼使用説明書では「職業選択法（付）性能検査器械使用法 改訂第二版」（山越，1927）とした。

現存する心理学古典的機器類の中で適性・性能検査に関わるものの割合はかなり高い。吉村（2017）では、現存するそれらの機器をリストアップした。それらの中には日本で独自に開発されたものが多く、それがわが国で製造された心理学古典的実験機器の特徴と言える。

第6節 台湾に残る機器類とわが国に残る心理学以外の古典的実験機器

第二次世界大戦が終わるまで、日本の帝国大学の1つとして、現在の台湾に台北帝国大学があった。当時導入された心理学実験機器類の一部が、現在の国立台湾大学に残されている。その存在の日本への紹介は、2005年から2006年に日本の心理学史に関する科学研究（平成15-17年科学研究費補助金（基礎研究（B））課題番号15402045 研究代表者西川泰夫放送大学教授（当時））の一環として、日本の研究者に

よる現地調査によって伝えられた（その概要は、大山・西川・荳阪・荒川，2006に示されている）。それらの機器類の存在は、高雄医学大学心理学系の櫻井正二郎副教授を中心に発掘され、台湾大学側で保存・整理に努められた。「心理学備品番号簿」の存在も明らかになっている。その事情は、櫻井・張（2010）が日本心理学会の大会において発表した、それ以外に、櫻井は『心理学ワールド』に記事を書いている。『心理学ワールド』の記事については、次節でまとめて記載する。また、国立台湾大学に現存する古典的心理学実験機器については、同大学が運営するホームページに機器の写真とともに関連情報が掲載されている。さらに、国立台湾大学に客員教授として訪れていたシュピルマン（L. Spillmann）教授が、同大学の心理学研究室に残る古典的実験機器類に強い関心を示し、同大学の心理学研究室スタッフや櫻井らの協力を得て、Spillmann, Lin, Sakurai, and Chen（2017）に英文でまとめた。もう1つの国外の帝国大学の京城帝国大学（現ソウル）については、台北帝国大学ほど機器類が多く残っていないようだが、佐藤（2002）が現存品について報告している（pp.433-442）。

「心理学ミュージアム」の「歴史館」に登録した実験機器の中には、狭い意味での心理学だけでなく、スポーツ科学に関わるもののがかなり混在している。具体的には、握力計や背筋力計である。国産品だけでなく、Stoelting社製の背筋力計やBoulitte社製の握力計なども現存している。吉村・林（2015）は、現存品を手がかりにわが国における握力計と背筋力計の歴史を明治にまで遡り追跡した。

また、「歴史館」に登録されているものとは全く別ではあるが、「歴史館」に登録するために各大学の心理学機器の撮影と資料整理を担当してくれた合同会社AMANEの堀井らは、わが国に残る物理学関係の古典的実験機器の資料整理とリポジトリ公開に努めている（堀井，2017；堀井・堀井・上田・林・高田・山地，2017など）。物理学実験機器については、心理学実験機器と同様、台北帝国大学にも残されており、物理学分野の研究者によりその価値が指摘されている（たとえば竹腰，2006，2007）。このように、心理学以外の分野においても、歴史的資料としての古典的機器類の存在が評価されている。心理学の古典的機器の評価がこれらの研究と連携することにより、今後、わが国における科学史を跡づける機器類という史料研究の充実が図れるものと期待できる。

第7節 『心理学ワールド』の連載記事

最後に、日本心理学会の会員誌である『心理学ワールド』に、巻頭言のあとのページに設けられた「心理学ミュージアム」のコーナーに掲載された記事のうち、現存している日本の心理学古典的実験機器に関するものを総覧する。このコーナーではカラー写真を生かすことができるため、現存する古典的機器類について、毎回、数枚のカラー写真を掲げ、解説が加えられてきた。しかし、この会員誌は年度

ごとに編集方針が決められるため、結果的に20回にも及ぶ古典的実験機器に関する記事は単発的なものになっている。そのため全体像がつかみにくく、ここに該当記事を一覧表示し、全体像を示したい。

表1を見ると、記事のテーマの多くが本稿で言及した筆者による論文内容と重複していることがわかる。そこで、筆者によらない記事を中心に、コメントを加えたい。最も古い長田と増田の記事(38号)は、長田が研究代表者で行った科学研究において、

表1 『心理学ワールド』の「心理学ミュージアム」欄に掲載された日本の古典的実験機器に関する記事一覧

発行年	号数	記事タイトル	執筆者(所属)
2019	87	古典的実験機器を有効利用するために一関連情報の保存のすすめ	増田 知尋(文教大学) 草野 勉(文教大学)
2019	86	文教大学における心理学の古典的実験機器の常設展示と学びへの活用	増田 知尋(文教大学) 草野 勉(文教大学)
2019	85	握力計いろいろ	吉村 浩一(法政大学)
2019	84	水や空気を信号にしていた古典的実験機器	吉村 浩一(法政大学)
2018	83	実験装置を通して見る心理学の歴史—方法としての古装置の常設展示	藤 健一(立命館大学)
2018	81	日本に残されたタキストスコープの歴史を遡る	吉村 浩一(法政大学)
2018	80	装置の発明・再発明と偶然——異なった経緯から独立に考案された累積記録	藤 健一(立命館大学)
2017	79	輸入された5台すべてが現存する『ヒップのクロノスコープ』	吉村 浩一(法政大学)
2017	78	名前もわからないまま保存されている古典的実験機器	吉村 浩一(法政大学)
2017	77	大正末の適性検査——「性能検査」という言葉をご存じですか?	吉村 浩一(法政大学)
2016	72	安藤研究所という名の会社	吉村 浩一(法政大学)
2015	69	オーソリティ・レコードとしての製品カタログ	吉村 浩一(法政大学)
2015	68	「実験心理学ミュージアム」から「心理学ミュージアム」へのお引っ越し	吉村 浩一(法政大学)
2014	67	特許資料——過去の実験装置の構造と機能を推理する	藤 健一(立命館大学)
2014	66	動作模型——現存しない過去の実験装置の動作を復元する	藤 健一(立命館大学)
2014	64	資料保存小委員会とその活動	サトウ タツヤ(立命館大学)
2013	63	1945年以降の台湾における、古典実験心理学機器の運命	櫻井 正二郎(高雄医学大学)
2013	62	備品番号簿と台北帝国大学心理学研究室に存在した実験機器	櫻井 正二郎(高雄医学大学)
2012	59	ヴェルトハイマーの仮現運動から100年	高砂 美樹(東京国際大学)
2011	53	これはなに?	増田 知尋(食品総合研究所) 長田 佳久(立教大学)
2007	38	古典的実験機器の保存及び情報収集について	長田 佳久(立教大学) 増田 知尋(立教大学)

全国の大学に散在している古典的実験機器の中には廃棄寸前のものがあり、それらを立教大学でレスキューする活動を始めた頃の記事である。53号の記事は、カイモグラフについての解説である。サトウによる64号の記事は、日本心理学会の教育研究委員会の中に資料保存小委員会が設けられ、それにより現存する古典的実験機器の整理が進められていることや、西川泰夫放送大学教授（当時）や辻敬一郎名古屋大学教授（当時）が研究代表者となった科学研究費の補助を得て行われた共同研究が活動の原動力となったことが解説されている。59号の高砂による記事は、ゲシュタルト心理学の実験的研究の出発点となったウェルトハイマーのタキストスコープを紹介するものである。この機器と原理的に最も近いタキストスコープが台湾大学に現存していることを指摘しておきたい。62号と63号の櫻井による記事は、台湾大学において台北帝国大学当時の機器類が発見されたときの様子や、それらの保存に努められている様子が記されている。4回に及ぶ藤の記事内容は本稿で触れたので、改めての紹介は控える。86号と87号の増田と草野による記事では、全国に散らばっていた廃棄寸前の機器類を立教大学でレスキューし、その後、文教大学に移管し保存・展示していることと、こうした歴史的史料を若い学生たちの心理学教育の教材として活用する試みが紹介されている。

表1に掲げた記事は、一部を除き日本心理学会のホームページで閲覧することができる。

終わりに代えて：すべてはこの科学研究補助事業から始まった

本稿に示した一連の研究は、西川泰夫北海道大学教授（当時）が研究代表者となり始められた科学研究（西川，2001）と、同じく西川泰夫放送大学教授（当時）が研究代表者であった科学研究（西川，2006）が原動力となり進められた。この2つの科学研究において、アクロン大学博物館や台湾大学に残る古典的機器類の視察を行ったことが、現存する心理学古典的実験機器の調査と保存をわが国でも行うことの重要性を認識させた。最初の立ち上げであるこれら2つの科学研究とその後の科学研究において、研究分担者としてあるいは研究協力者として心理学古典的機器の調査・研究の重要性を訴え続け自らも史料探索を行われた大山正先生が、昨年暮れ（2019年12月16日）亡くなられた。本稿を閉じるに

あたり、大山正先生にお礼を申し上げるとともに、ご冥福をお祈ります。

文献

- 安藤謚次郎（1923）心理学的適性検査法 上・下 精神社
- 安藤謚次郎（1927）進化と能率 安藤研究所
- 淡路円治郎（1927）職業心理学 応用心理学研究第3巻
- 藤 健一（2006）立命館大学文学部心理学研究室の古装置類（1948～2004）心理学史・心理学論, 7/8, 39-51.
- 藤 健一・吉岡昌子（2013）スキナーの製作した機械式累積記録器の変遷と装置試作行動の分析：1930～1960 心理学史・心理学論, 14/15, 13-29.
- 畑山俊輝・牧野順四郎（2003）東北帝国大学における古典的実験機器の導入と実験心理学の展開 辻敬一郎（代表）本邦における実験機器利用の史的展開 平成12・13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究報告書（課題番号：12410046）
- 日高聡太・行場次朗（2009）東北大学心理学研究室における古典的心理学実験機器の歴史と特徴——京都大学との比較から—— 心理学史・心理学論, 10/11, 49-55.
- 堀井洋（2017）科学実験機器資料サブジェクトリポジトリプロジェクトの現状と課題 大学の物理教育, 23, 27-29.
- 堀井洋・堀井美里・上田啓未・林正治・高田良宏・山地一禎（2017）学術資料を対象にしたサブジェクトリポジトリの構築—科学実験機器資料および教育掛図資料を事例として—情報知識学会誌, 27, 357-361.
- 丸山欣哉（1999）成立期の東北大学文学部心理学研究室 心理学評論, 42, 349-367.
- 増田幸一（1925）適性考査法要領 同文館
- 西川泰夫（2001）日本の現代心理学形成にかかわる学問史的検討 平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書（課題番号10410024）
- 西川泰夫（2006）日本の心理学史に関わる海外資料収集調査研究 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（課題番号15402045）
- 荳阪直行（2000a）心理学研究室における古典機器
- 荳阪直行（編著）（2000）実験心理学の誕生と展開

- 実験機器と史料からたどる日本心理学史——
京都大学出版会 pp.327-345.
- 苅阪直行（編著）（2000b）実験心理学の誕生と展開
——実験機器と史料からたどる日本心理学史——
京都大学出版会
- 苅阪良二（1999）心理学における歴史的実験機器について：京都大学の場合 心理学評論, 43, 125-140.
- 大槻快尊（1911）実験心理学 成美堂
- 大山正・西川泰夫・苅阪直行・荒川渉（2006）国立台湾大学所蔵の旧台北帝国大学歴史的心理学機器について 平成15-17年科学研究費補助金（基礎研究(B)）課題番号15402045（研究代表者西川泰夫）研究成果報告書 pp.211-222.
- 大山正・佐藤達哉（1999）東京大学における心理学古典実験機器について——備品台帳を手かりとして—— 心理学評論, 42, 289-312.
- 櫻井正二郎・張幸真（2010）台北帝国大学における実験機器使用状況の調査Ⅱ 日本心理学会第74回大会論文集, 14.
- 佐藤達哉（2002）日本における心理学の受容と展開 北大路書房
- 島津製作所（1926）心理学実験器械目録 島津製作所
- 島津製作所（1936）島津理化学器械目録 第300号 島津製作所科学器械部
- Spillmann, L., Lin, T-H., Sakurai, S., and Chen, C-C. (2017) The Historical Psychological Instruments at National Taiwan University. *Chinese Journal of Psychology*, 59, 213-250.
- 竹腰秀邦（2006）台北帝国大学と京都大学における初期の加速器開発と原子核物理学的研究（前編）加速器, 3, 384-390.
- 竹腰秀邦（2007）台北帝国大学と京都大学における初期の加速器開発と原子核物理学的研究（後編）加速器, 4, 18-23.
- 東京帝国大学文科大学心理学教室（編）（1910）実験心理写真帖 弘道館
- 山越工作所（1927）職業選択法（付）性能検査器械使用法 改訂第二版 山越工作所
- 山越工作所（1932）山越性能検査法 山越工作所
- 山越工作所（1933）山越工作所実験心理学生理学器械目録第二版 山越工作所
- 吉村浩一（2012）1970～80年代のわが国の心理学研究における実験機器利用——竹井機器工業製造品データベース構築の意義—— 法政大学文学部紀要, 65, 97-115.
- 吉村浩一（2013）カタログに載らなかった竹井製作所・竹井機器工業の心理学実験機器を通して記憶学習実験機器の起源を探る 心理学史・心理学論, 14/15, 57-69.
- 吉村浩一（2014）第二次世界大戦以前の我が国の心理学実験機器に対する山越工作所の貢献——山越カタログを通してみる製造品の全容—— 法政大学文学部紀要, 68, 99-115.
- 吉村浩一（2016a）東北大学に残る心理学古典の実験機器の再検討——2015年の現地調査により得られた新しい知見—— 法政大学文学部紀要, 72, 147-160.
- 吉村浩一（2016b）島津製作所が製作・輸入した心理学古典の実験機器 心理学史・心理学論, 16/17, 37-53.
- 吉村浩一（2016c）第二次世界大戦前に心理学実験機器を製造していた安藤研究所 法政大学文学部紀要, 73, 69-82.
- Yoshimura, H. (2016) Early psychological apparatuses stored in Japan: Imported, replicated, and reformed apparatuses before World War II. *Japanese Psychological Research*, 58, No. Suppl. 1, 32-45.
- 吉村浩一（2017）第二次世界大戦前の適性検査と性能検査で用いられた機器類 法政大学文学部紀要, 74, 67-79.
- Yoshimura, H. and Gyoba, J. (2015) Classic apparatuses for psychological experiments preserved in the psychology laboratory of Tohoku University. *Tohoku Psychologica Folia*, 74, 19-27.

（2020年1月21日受付、2020年2月5日受理）

A review of the literature on existing classic psychology apparatuses in Japan

YOSHIMURA, Hirokazu (Hosei University, Faculty of Letters, 102-8160, Japan)

e-mail: yosimura@hosei.ac.jp

The present research is a review of the articles about the psychological classic apparatuses existing in Japan. Seven collaborative investigation that were performed by Grants-in-Aid for Scientific Research from 1998 to 2014 promoted the study. In Section 1 and 2, the author lists the articles concerning the apparatuses existing in University of Tokyo, Kyoto University, Tohoku University, Kwansei Gakuin University, Ritsumeikan University, Niigata University, and Kanazawa University. Aptitude Test-related apparatuses made up a significant proportion of the apparatuses (Section 5). In Taiwan National University, dozens of classic psychology apparatuses still exist, which were purchased by Taihoku Imperial University. In Section 6, the author comments on them and the apparatuses of other academic fields (physics and sports science). In Section 7, 20 articles concerning the classic psychological apparatuses existing in Japan which were published in the membership magazine of Japanese Psychological Association, *Shinrigaku World (Psychological World)*, are listed.

Key words: history of Japanese psychology, classic experimental apparatus, imperial university, aptitude test